

# 動物遺存体の調査

埋蔵文化財センター

## 1 現生標本の作成

動物遺存体とは、当時の人々の食料残滓であった骨や貝がほとんどで、その他にそこに生息した陸産の貝類や小動物が含まれる。骨は解体や調理のために細片となって種の判別が難しい場合が多い。そのため細片となった骨片を1点ずつ現生動物の標本と比較しながら何の骨であるかを同定することが不可欠である。そのような目的のため、現生動物の骨格標本の作成につとめ、1984年度には哺乳類40個体、鳥類23個体、魚類50個体、そのほか両生類、爬虫類、貝類などの現生動物の骨格標本を作成してきた。標本の製作には、電気ヒーターを使用してタンパク質分解酵素(パパイン)の5%溶液を50—60℃に温め、死体を液浸させる。そしてドラフトチャンバー中で悪臭を排気しながら肉や油脂を溶かし、2～3日で成骨化し、その後エチルアルコールで脱脂して標本としている。

## 2 大阪府亀井遺跡出土動物遺存体の調査

大阪文化財センター、近畿自動車道吹田天理線関連調査中、亀井遺跡切り広げ部から出土した動物遺存体約2,300点について整理分析を行った。1点1点の骨には解体や調理のための割った痕跡、切り傷、焼け焦げなどの文化的な情報や、性別、年齢、保存度など生物学的な情報が観察できる。そのような多岐に渡る文化的、生物学的な情報を整理するためにパーソナルコンピュータの使用を試みた(下図)。この使用法は動物遺存体以外の遺物でも応用可能であるので、今後、出土遺物を全て入力し、各種の遺物の層位や遺構ごとの出土関係などを明らかに出来るようにこの研究を推進したい。今回は分析の対象とした破片2,300点中、一定の大きさの1,500点余りを入力し、さまざまな角度から考察を加えた。結果は以下のとおりである。

1. 1 cm以上の骨片1,504点中684点が科または種まで同定でき、そのなかではイノシシが383点(56%)、ニホンジカが236点(35%)、両者

で同定できた出土量の91%を占める。2. イノシシ、ニホンジカの幼獣の占める割合が多いこと。3. 灰化、炭化などの直接火熱を受けた痕跡のある骨が43%と多くこの遺跡での調理法の特徴を示している。4. 方形周溝墓に伴う供献土器の甕の中にイノシシの幼獣の顎骨が検出され全身骨も存在した可能性が強いことから、方形周溝墓をめぐる祭祀に新しい供献例を加えた。

ファイルの名前	B:KM2.DAT	カード番号	1296
1 登録番号	:	1456	
2 遺跡名	:	亀井遺跡 2	
3 地区	:	24	
4 層位	:	下層上半	
5 遺構	:	SD2401	
6 遺物番号	:		
7 時代/時期	:	弥生中期	
8 日付	:	830719	
9 TAXA	:	Mammal	
10 種名	:	Sus scrofa	
11 部位	:	Mandible(M1-3)	
12 左右	:	R	
13 PORTION	:		
14 SEGMENT	:		
15 成長度	:	M3 worn	
16 切痕	:		
17 火熱	:	Dark	
18 計測値	:	M3 L34.5 W16.0	

(松井 章)

コンピューター入力の一例